

お経きょうが書き記しるされているお経きょうぼん本の始まりは、長い葉っぱでした。お釈迦さまの時代から口伝くちづたえで残されていた教えが、後代になり何枚もの長い葉っぱに書きとめられ、それらをまとめて縦系たていとで縛しばりました。この縦系のことを「経きょう」といい、それがいつの頃からか、葉っぱを束にしたもののことや教えそのものを「お経」と呼ぶようになったといわれています。

お経との接し方には、伝統的に四つの形式があります。一つ目は「受持じゆじ」、身につけて所持しよじすること。二つ目は「読誦どくじゆ」、読み唱となえること。三つ目は「解説げせつ」、意味を説き明しよしゆかすこと。四つ目は「書写しよしゆ」、書き写すこと。以上の四つです。

本日はこのうちの二つ、「読誦どくじゆ」と「解説げせつ」を紹介いたします。

まずは「読誦どくじゆ」、お経を唱ほうようえることです。主に法要などで行いますが、お経を唱えるということは、亡き方にお経そのものの功德や、お経を一生懸命に唱えている人の姿を供養するという意義があります。法要の際には、儀式の荘厳そうこんさを損なうことがないようにお唱えをするので、お経の詳しい意味を考えることはあまりできません。

そして次は「解説げせつ」、お経の意味を説き明しよしゆかすことです。時には辞書を引きながら、僧侶に教わりながら、そして時には自分自身の日常生活の姿を思い浮かべながら、お経を人生の教科書として、その意味を考えていきます。ひいては、お経に書かれている内容を、自分の生き方として取り入れていくことでもあります。

「キリスト教の聖書は言葉がわかりやすいのに、仏教のお経は難しい」というご指摘をいただくことがあります。たしかに、漢字だらけのお経では、耳で聞いて意味を理解することは難しいかも知れません。

お経と現実の世界を橋渡はしわたしするのは、私たち一人一人の良い人生を送りたいと思う気持ちです。初めは難しく感じるかも知れませんが、それでも、少しずつ、そこに書かれている内容を理解しようと心掛けてみてください。お経の言葉がだんだんわかってくると、そのうち自分の身に置き換えて理解できるようになってきます。お経が説いている事柄を心掛けていたら、生活が穏やかになっていくという功德もあるでしょう。

時代が変わっても、人の生き方が変わっても、お経の言葉が変わることはありません。移ろいゆく社会や人を横系よこいとにたとえば、お経は変わることなく正しいことを伝えようとする縦系たていとにたとえることができるかもしれません。その縦系みちびに導かれた、今日一日が良き日でありますように。

— 終 —